



東南アジア近現代史教育についての 考察と文献紹介

平山陽洋

大学における東南アジア教育

いまの日本の大学で、東南アジアという地域についての講座を開講する事例が、徐々に増えているように感じる。もちろん、日本全体でのその数は、ヨーロッパやアメリカ、東アジアなど他地域を教える講座と比べると、少ないというのが実情だろう。とはいえ、今後もおそらく、東南アジアについての講座が、少しずつかもしれないが、その数を増やしていくように思われる。というのも、グローバルゼーションという言葉の広がりとともに、日本と世界中の地域とのつながりが強調され、そうした諸地域について教える講座の開講が大学に要請されてきた。ここ二十年ほどの趨勢が、今後も基本的にはつづいていくだろうし、そして、その趨勢のなかで、東南アジアについての講座も、一層求められていくだろうと予想されるためである。

しかし、いざ東南アジアについてなにをどのように教えるかを考え、教育の準備をはじめてみると、その準備が実際にはなかなかほかと異なる、という事態に直面するかもしれない。というのも、これまで多く指摘されているように、高校時代に東南アジアについてしっかりと学んだことのある学生は多くない。そして、その数が増えることは、残念

ながら今後もすぐには期待できない。とすると、そうした現状を前提に、学生の理解を促す教育を準備する必要があるためである。

歴史をめぐる教育

東南アジアの歴史を教えるとしよう。その場合に、ある時期の政治や経済、社会の構造だったり、歴史の流れだったり、ある程度大胆に概略化・単純化し、わかりやすく教授する、という工夫が考えうる。概略化・単純化された構造や流れは、もちろん、さまざまな事象の捨象のうえに成り立つものであり、その意味で、問題点を抱えているのも事実である。しかし、とくに初学者を相手に教える場合には、そうした構造や流れを用いるのは有効だろう。一方、その構造や流れで説明が困難な事象については、学生の歴史の理解が深まっていく段階で、それら事象の歴史的な意味を、あらためて考えてもらえばよいだろう。

こう考えたときに、今でも思い出すのは、筆者が学部時代に、ベトナム研究の大家である故櫻井由躬雄先生から受けた、東南アジアの前近代史にかんする集中講義である。その講義では、各種の王朝が成立した政治

経済的な条件や、ヨーロッパ人が到来し拠点築いた条件を、交易や一次産品生産の構造への着目という一貫した視点から説明し、その構造の変化を追う、そうした工夫が施されていた。講義では、たとえば、航海技術の発展がもたらした海上交易路の変化と、それに結びつく陸上交易路の変化が説明され、それら相互に関連した変化と関連づけて、諸王朝の興亡やヨーロッパ人の到来が説明された。あるいは、林産物の採取・集積と農作物の生産・集積のあり方と関連した諸王朝の盛衰もまた、説明されていた。

筆者は、ベトナム現代政治史、第一次インドシナ戦争史を専門とするが、とある大学で東南アジアの近現代史を教える講義を受けもつ機会に恵まれたことがある。そのときに、櫻井先生の授業のように巧みにはいかないまでも、同様に構造とその変化を説明しようと考えた。けれども、その試みがうまくいったかという点、なかなかそうはいかなかった。その理由を考えたときに、たんに、自分の実力不足という問題はあつたらう。しかし、ある困難に直面したのも大きかったように思われる。歴史の構造・変化を概略化・簡略化するにあたっては、取りあげる諸事象を取捨選択するうえで、一貫した基準・視点をおおまかにであれ設定する必要があるが、近代史と現代史を、そうした一貫性のもとにつなぎあわせて語るのが想像以上に困難なことに、気づかされたのである。

東南アジア近現代史を理解するうえでのずれ

東南アジアの近代史を語る枠組みと、現代史を語る枠組みは、この数十年、それぞれ精緻に練りあげられてきたが、それらのあいだには、ある種のずれがあるのかもしれない。そのことに思い至らせてくれたのは、二〇一〇年代に入ってから刊行された、次の教科書的な入門書である。

●加納啓良著『東大講義 東南アジア近現代史』めこん、二〇二二年

本書は、インドネシアを中心とした東南アジア経済史研究の大家の手になる。この本は、交易や一次産品生産に着目して前近代史を認識する枠組みに慣れた読者であれば、違和感なく読み始めることができる。

本書前半部から具体的に読み取れるのは、十九世紀に進展した植民地支配の構造が、旧来の王朝の支配構造とは性質を異にする、ということである。つまり、一方で後者の構造が、交易や農業生産のうえで重要な諸地点をつなぎあわせるかたちでネットワーク的に形成されたのに対して、前者の植民地支配の構造は、ヨーロッパを中心として拡大する世界の市場の必要に応じるべく、東南アジアにおける農業や鉱業の生産拡大という経済開発を目指し、そのために支配領域を平面的に拡張して形成された（植民地化を免れたタイも、新たな支配構造を整えていく）。そして、そうした支配構造の転換を可能ならしめたのが、蒸気船や鉄道といった交通手段の発展にもとづいた交通網の整備や、情報のやりとりの速度を一举に速めた海底電信網の整備であることもまた、本書前半部からよく理解できる。

さらに、支配地域の人口を把握するため国勢調査が実施されたり、各国内で経済を統合するための通貨制度が整備されたりするなど、いわゆる近代国家の諸制度が築かれていくのもまた、支配構造の転換と関連していることがわかる。加えて、そうした趨勢のなか、拡大する国家組織を支える人材を育成する必要から近代教育制度が整備され、その制度のもとで教育を受けた人々が、やがては植民地支配に抵抗するナショナリズムの担い手にもなっていく、という見取り図が整えられていく。

このように歴史の構造と流れが、近代技術の発展に伴う経済開発、そして開発された経済と世界市場との統合、といった視点を軸に叙述されていく本書前半部は、東南アジアの近代史を教える立場の人間にとつて、非常に有意義である。さらに本書には、ただ概略化された構造・流れだけでなく歴史を理解するのを戒めるように、細かな出来事にかんする記述も織り込まれている。

そうした意味で、非常に優れた近代史の叙述だと感じさせられる。そして、そのような近代史を提示する本書が、本稿筆者にとってさらに大きな意義をもつのは、本書前半部の近代史の叙述と、本書後半部で展開される現代史の叙述のあいだに、ある種のずれを感じさせるからである。

現代史の叙述は、各地でナショナリストたちが独立を獲得していく第二次世界大戦後の時期の説明とともに始まるが、その説明の際に、独立戦争や各国内紛が、適宜説明されていく。さらに、そのあとにつづく独裁のもとの経済開発の時期、民主化の時期、冷戦終結以降のASEANによる経済統合の時期といった時期区分の認識に基づいて、二〇〇〇年代に至るまでの各国の政治情勢、経済情勢が網羅的に叙述されていく。そして、こうした網羅的な叙述が丁寧に着意されているだけに、先のずれに気づかされることにもなる。

現代史においては動乱や独裁の時期がつづくため、それを叙述する学術書では、一般的な傾向として、いつなが起ったかという政治的出来事の説明が多くなりがちである。また、経済開発の叙述にかんしては、経済統計の技法の世界的共有が進展するのをおそらくは背景として、製造業等の産業育成や海外からの投資、対外貿易の如何の説明が中心になるのだろうと思われる。これまで、現代の政治や経済の学術書では、そうした説明が重ねられてきたのであり、それらをふまえたうえで、本書の現代史の叙述もあると考えられる。

しかし、近代史の叙述において、平面的な支配へという構造的転換が起こり、それに伴い近代国家の諸制度が整備されたことが説明されている。その説明を重く受けとめた者にとっては、そうした支配構造や諸制度が、独立以降の国家にどのように引き継がれたか、あるいは引き継がれなかったかがわかると、近代史と現代史を一貫した視点で連続して理解することができるのにと、感じさせられる。たとえば、交通網、電信網、国勢調査の技法、通貨制度、教育制度は、独立以降にどうなっていたかの説明があればと感じる。あるいは、独裁により浸透する国家権力のもとで、都市社会や農村社会の空間的な編成がいかに組みなおされた

か、そして民主化の動きが、その空間編成にどのように影響したか、という関心も惹起される。

いずれにせよ、本書は、近代史研究で蓄積されてきた叙述と現代史研究で蓄積されてきた叙述のあいだのずれを気づかせてくれる。そのずれは、おそらく、両者の研究を丁寧に着目して、近代史と現代史をつなぎあわせようと試みたときに、はじめて感知されやすくなるものだろう。そうした試みとして、本書のもつ意義は非常に大きいと思われる。

ずれは修正しうるか

東南アジアの近代史と現代史を一貫した視点から説明するという教授方法を実践しようと考えたときに、もちろん、このずれをいかに修正するかが課題となる。本稿筆者が自身の講義の準備を進めていたときには、この課題は、なかなか解決の見通しのつかない、あまりに大きなものとして感じられた。と同時に、そのずれに正面から向き合い、そのずれの修正にやがてはつながりうる研究を、地道に進めていくことの大事さを痛感させられた。そうした感覚をより一層強めてくれ、ずれの修正にあたり比較という発想が重要ではないかと思ひ至らせてくれた書籍がある。以下に紹介する二冊である。

●清水一史・田村慶子・横山豪志編著

『東南アジア現代政治入門』ミネルヴァ書房、二〇一一年

本書では、ブルネイを除いた東南アジア十か国とASEANに対して一章ずつ設けられ、各章のなかで、各国・ASEANの専門家が、それぞれ現代政治の展開をコンパクトに解説している。本書の導入にあたる序章では、以後の各章で共通して、独立後の国民国家建設と国民統合がいかに進展したかを考える視点がふまえられていると読み取れる。と同時に、各章を読み進めていくと、国民国家形成と国民統合が各国で目指

されたといっても、その意味合いが異なってくることもまた、理解される。そして、その意味合いの相違が横並びに示されることにより、近代植民地支配下で共通して進展した平面的な支配の独立以降の展開を、それぞれ別個の国民国家形成・国民統合という文脈で、共通点と相違点の双方を比較しつつ検討する可能性が生まれる。

たとえば、多くの国で、国民統合にあたり、国内経済の開発が重要性をもったことはおおよそ共通しているが、その経済開発を左右する要素に違いがあると気づかされる。フィリピンの場合だと階層化された社会関係が影を落とし、マレーシアの場合は民族間関係が影響する。一方、広大な国土と海をもつインドネシアでは、地方間格差という要素が意味をもつ。これらの相違する要素を各国の文脈でほりさげて理解しつつ、その相違が生じることの歴史的な意味を、国民統合・経済開発という共通の考察枠組みにおいて検討することは、近代史と現代史をかけつなくうえて、重要な作業になってくるだろう。

そして、そうした慎重な比較の作業は、翻ってみるに、近代の植民地国家（とタイ）に対しても、おこないうるのではないだろうか。近代史研究と現代史研究の双方においてそのような比較が進むとき、両者のずれがよりよく修正されるのではないか。そう考えたとき、次の書籍が非常に興味深く読める。

●早瀬晋三著『マンダラ国家から国民国家へ——東南アジア史のなかの第一次世界大戦』人文書院、二〇二二年

本書の著者は、近世から近代にかけての東南アジア海域世界の歴史や、近現代日本・フィリピン関係史を研究し、現在の日本における東南アジア史研究をリードする歴史家である。

本書では、東南アジアにおける植民地国家（と独立を維持したタイ）が、近代国家の諸制度を第一次世界大戦までに整備していったこと、そして、植民地宗主国がヨーロッパでの戦争の遂行に力を注がねばならなくなつた第一次世界大戦を境目に、東南アジアで独立を目指すナシヨナ

リストたちの活動が活発になったこと、さらに、それが第二次世界大戦後の独立獲得につながっていくことが説明されていく。

なにより素晴らしく感じるのは、第二次世界大戦前の国家ごとの相違を、国家制度や社会編成という共通した考察枠組みを設定して検討する可能性が大きく開かれていることであろう。本書では、各国における税制や行政機構、土地所有制度、教育制度、輸出入一次産品開発の様態や国土インフラ整備の進捗が網羅的に、かつ凝縮して簡潔に叙述されている。本書で提示されているそうした諸点に着目して、東南アジアの近代史を比較の観点から再考し、さらに現代史も再考することができるのではないかと思われる。

事実関係をつきつめる

とはいえ、そうした比較の観点からの近代史、現代史のいずれを再考するうえで、地道な事実関係の確認からはじめなければならぬ場合がまだまだ多いだろう。そうしたつきつめる作業の重要性を教えてください。一冊を紹介し、本稿を締めることとした。

●関本紀子著『はかりとものさしのベトナム史』風響社、二〇二〇年

本書は、私たちが日常のなかで統一されてきたあたりまえのものと感じる度量衡という制度に着目し、それが植民地時代のベトナムで、統一がはかられながらも実際にはなかなかそうはいかず、国内地域差が残り続けた現実を、膨大な植民地行政資料を検証することで浮き彫りにする。本書は、ある制度が整備されたからといって、それだけでその制度が社会を特徴づけるとまではいえず、それが社会に浸透し、実際に社会を規定するまでに、長い時間がかかることを教えてくれる。この観点は、各国比較のうえで重要であろう。

本書は、実は、本稿筆者の大学院時代の非常に優秀な後輩の作品であ

る。彼女が日々、粘り強く地道に資料と取り組む姿に、尊敬の念を抱いていた。一方、第一次インドシナ戦争を研究する本稿筆者は、第二次大戦後の独立戦争にあたるその時期に、貨幣制度や土地測量制度の統一がなかなか進展しなかった事情を知っている。近代史であれ、現代史であれ、細かな事実関係を着実に明らかにすることが、やがては各国の比較へとつながり、さらに近代史を叙述する枠組みと現代史を叙述する枠組みのずれを修正することにつながることを願っている。